

利他行動に対する責任配分を規定する功利主義的規範

清水 計法

功利主義とは一般的に、社会全体における幸福の総和を増大させる行為や政策が望ましく、その過程で、どの人の幸福をも平等に考慮すべきだと考える思想的立場である（児玉，2012）。少なくとも誰か1人がコストを払って協力行動をとらなければならない社会的ジレンマ状況では、功利主義的に考えれば、協力行動に伴うコストが低い者や同じ協力行動で当事者全体の利益を最大化させる者、言い換えると全体の合理性を最大化させる者こそが協力すべきである。本研究は、全体の合理性を追求すべきであるという功利主義的規範によって、利他行動に対する各当事者の責任が配分されることを検討する目的で行われた。功利主義的規範によって責任が偏って分散・分配されることを示唆する社会的ジレンマゲームの研究は存在する（e.g., Diekmann, 1993; Chen, Au, & Komorita, 1996）。しかし、協力行動に自己利益を追求するという利己的な動機が含まれている研究が多く、協力行動の功利主義的規範による説明は十分になされているとは言えない。そこで本研究では、協力行動に自己利益が伴わない形の社会的ジレンマゲームを行い、功利主義的規範が規定する義務感や責任感を動機とする協力行動を測定した。

実験手続きは以下である。まず、3人の実験参加者は互いの顔が見えないように区切られたブースの中で5分間の作業を行い、その対価として報酬が与えられた。その後、「3人のなかで少なくとも1人が自分の報酬全てを放棄すれば他の人の報酬は維持されるが、誰も放棄しなかった場合は全員の報酬がごくわずかになる」というゲームを行った。参加者は、他者の選択を知ることができない状態で意思決定するように求められた。設定された条件は、与えられた報酬の金額が全員同じであると伝えられるシンメトリー条件と、クジを引き、ランダムに与えられた自分の報酬額が3人のなかで最も低いことがフィードバックされるアシンメトリー条件であった。なお、アシンメトリー条件では、3人全員が「自分の報酬額は3人のなかで最も低い」と認知するような教示がなされた。ゲームは、自分が放棄したかどうかゲーム終了後に他の参加者や実験者に知られる露見状況と、誰にも知られない匿名状況の2つの状況で行われた。アシンメトリー条件の参加者は、露見状況では外在・内在する功利主義的規範によって、協力行動に対する社会的・道徳的責任が他の人よりも多く配分されており、また匿名状況では、内在する功利主義的規範によって道徳的責任が集中していると考えられる。したがって露見状況でも匿名状況でも、アシンメトリー条件では、責任が等しく配分されるシンメトリー条件よりも放棄者数が多いことが予想される。

分析の結果、どの条件間でも協力者数(放棄者数)に有意な偏りはみられなかった。しかし実験後の質問紙から、協力行動の規定因として、「道徳的に考えて、この状況では誰よりも自分が放棄すべきであり、誰も放棄せず全滅すれば自分の責任だ」という“道徳的責任感”と、「他者は放棄しないだろう」という推測、すなわち“他者の非協力”が確認された。そして“道徳的責任感”は、「自分が放棄することが当事者全体にとって最も合理的である」という“全体合理性の認知”を行っている者ほど高いことが分かった。これは、内在化された功利主義的規範の存在を示唆するものである。しかし“道徳的責任感”の一側面である“道徳的義務感”は、「他者は放棄する義務を感じているだろう」という推測、すなわち“他者の義務感”との間に弱い正の相関があった。協力者は1人であり、功利主義的に考えるならば“道徳的義務感”と“他者の義務感”は負に相関するはずである。この点はさらなる検討が必要である。

本研究ではサンプル数が小さく、露見状況特有の外在する功利主義的規範の効果をみることができなかった。今後の課題として、サンプル数を増やして露見状況、匿名状況ごとの詳細な分析を行うことが挙げられる。また、責任配分に関しては、第三者の視点を取り入れることも必要であろう。（社会心理学）